

AHP (Analytic Hierarchy Process) による大学生の 貯蓄意識の分析

ガンガ伸子, 尾崎 明美, 清水奈津子

(長崎大学教育学部)

原稿受付平成 17 年 12 月 24 日; 原稿受理平成 18 年 7 月 1 日

The Analysis of University Students' Saving Consciousness by AHP (Analytic Hierarchy Process)

Nobuko NGANGA, Akemi OSAKI and Natsuko SHIMIZU

Faculty of Education, Nagasaki University, Nagasaki 852-8521

This paper is intended as analysis of the university students' saving consciousness by using Analytic Hierarchy Process (AHP), which is well known as multiple criteria decision-making tool. In order to make this analysis, the hierarchic model of students' saving consciousness was created. This model had three criteria and four alternatives. The following results were obtained: As a whole, the priority of students' consciousness on saving for "Supporting their future life" was the highest, but theirs in the preparation for the risk were scarce. Furthermore, the students' AHP evaluation was characterized by sex, academic year, staying with parents or not, and the saving amount they held. The female students had longer period of time for life planning than male students. The second year students had the saving consciousness for their enjoyment and buying things they wanted in their campus life strongly, but the tendency which the higher year students considered their future life planning more important and for longer period of time. Moreover, the students who held much saving considered their future life planning more important, and also had stronger uneasiness which runs short of money. The student staying with parents home considered their future life planning the most important. The other hand, the student who separated from parents home considered saving more important for supporting their present campus life rather than their future life planning. It seems that they did not afford to consider their future life planning, because they carried out their budget management.

(Received December 24, 2005; Accepted in revised form July 1, 2006)

Keywords: AHP (Analytic Hierarchy Process) 階層分析法, university student 大学生, saving consciousness 貯蓄意識, decision-making 意思決定.

1. 緒 言

わが国の家計貯蓄率 (SNA ベース) は国際的にみて高水準を保ってきたが, ここ数年は急速に低下してきている。その原因のひとつに, 近年社会問題化しているニート (若年無業者) やフリーターの増加が考えられる。大学を卒業しても定職につかない若者^{*1}や, 短期間で退職し, フリーターになってしまう若者も急

増している。その背景には, バブル崩壊後長引く景気低迷による若年の雇用が悪化していることがあげられるが, 若者の職業や将来に対する意識の変化も大いに関係していると思われる¹⁾。最近の若者には, 将来の目標が立てられない, 目標実現のための実行力が不足する者が増加している^{*2}という指摘がしばしばされている。この問題は, 若者の職業的自立を阻害すると同時に, 将来に向かって具体的な人生設計をたてる能力

^{*1} 文部科学省「学校基本調査」(平成 15 年度)によると, 大学卒業後の無業者は 1993 年の 3 万 1,766 人から, 2003 年には 12 万 2,674 人と 3.9 倍に急増した。

^{*2} 若者自立・挑戦戦略会議「若者・自立挑戦プラン」(平成 15 年 6 月)。

をも低下させている。そこで、本研究では、現代の若者がどのように人生設計をとらえているかについて、貯蓄に関する意思決定プロセスの解明から取り組むこととした。長崎県の大学生を対象に、どのような評価基準で貯蓄に関する意思決定を行っているかを、AHP (Analytic Hierarchy Process) を適用して分析した。AHP は、1970 年代に Saaty²⁾ によって開発され、政治、経済や経営、個人的問題などの意思決定において広く活用されている。AHP は、人間の持っている主観や勘が反映される、多くの目的を同時に考慮できる、あいまいな環境を説明できる、意思決定者が容易に使えるという特徴³⁾⁴⁾ を持つモデルであることから、従来の意思決定法では対処できなかった問題を扱うことができる。

本研究を進めるにあたって、具体的には、長崎県の大学生の貯蓄に関する階層構造モデルを構築した後、インターネットで大学生の貯蓄意識調査を実施し、それを AHP に適用するという手順で行った。世帯を対象とした貯蓄意識調査³⁾は継続的にされており、これらの調査によると、主な貯蓄目的は、ライフサイクル目的、予備的動機、遺産動機に大別できる。しかし、社会に出る前で職業経験が乏しく、あまり貯蓄保有額のない大学生の貯蓄意識を調査し、その意思決定問題に焦点をあてた分析はまだなされていない。AHP を適用して、将来を担う大学生の貯蓄に関する意思決定プロセスを分析することは、若者の生活設計に対する考え方を明らかにする上で有効であると考えられる。

2. 分析方法

(1) AHP の手順

AHP を適用して意思決定問題を解決するには、① 問題の階層化、② 要素のペア比較、③ 優先度の計算の手順で実施する。

①「問題の階層化」とは、問題の要素を、「最終目標 (ゴール)」「評価基準」「代替案」の関係でとらえて、階層構造 (ヒエラルキー) を作り上げることである。階層の最上層は、1 個の要素からなる総合目標である。それ以下のレベルでは、意思決定者の主観的判断により、いくつかの要素 (評価基準) が 1 つ上のレベルの要素 (最終目標か評価基準) との関係から決められる。階層の最下層には、代替案を置く。② 要素

のペア比較は、階層構造の各レベルの要素間の重み付けを行うことである。あるレベルにおける要素間のペア比較を、1 つ上のレベルにある関係要素を評価基準として行う。ペア比較に用いられる値は、表 1 に示した重要性の尺度に従い、1/9, 1/8, ..., 1/2, 1, 2, ..., 8, 9 とする。各レベルの要素間の重み付けが計算されると、この結果を用いて階層全体の重み付けを行う。これにより、最終目標に対する各代替案の優先順位 (プライオリティ) が決定される⁵⁾。

計算方法は、以下に示すとおりである⁶⁾。

階層のあるレベルの要素を $A_1, A_2, \dots, A_n$ のすぐ上のレベルの要素に対する重み $w_1, w_2, \dots, w_n$ を求めるとき、 a_i の a_j に対する重要度を a_{ij} とする。要素 $A_1, A_2, \dots, A_n$ のペア比較マトリックスは

$$A = [a_{ij}]$$

となる。 $w_1, w_2, \dots, w_n$ が既知のとき、

$$A = [a_{ij}] = \begin{bmatrix} w_1/w_1 & w_1/w_2 & \cdots & w_1/w_n \\ w_2/w_1 & w_2/w_2 & \cdots & w_2/w_n \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ w_n/w_1 & w_n/w_2 & \cdots & w_n/w_n \end{bmatrix}$$

ただし、

$$a_{ij} = w_1/w_j, a_{ji} = 1/a_{ij}, w = \begin{bmatrix} w_1 \\ w_2 \\ \vdots \\ w_n \end{bmatrix} \quad (i, j = 1, 2, \dots, n)$$

マトリックス A に w を掛けると、

$$A_w = \begin{bmatrix} 1 & w_1/w_2 & \cdots & w_1/w_n \\ w_2/w_1 & 1 & \cdots & w_2/w_n \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ w_n/w_1 & w_n/w_2 & \cdots & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} w_1 \\ w_2 \\ \vdots \\ w_n \end{bmatrix} = nw$$

表 1. 重要性の尺度

重要性の尺度	定 義
1	同じくらい重要
3	少し重要
5	かなり重要
7	非常に重要
9	極めて重要

2, 4, 6, 8 は中間のときに用いる。重要でないときは、逆数を用いる。

³⁾ 金融広報中央委員会：「家計の金融資産に関する世論調査」、郵政総合研究所：「家計における金融資産選択等に関する調査」。

AHP (Analytic Hierarchy Process) による大学生の貯蓄意識の分析

あるいは,

$$(A - nI)w = 0$$

となり, 固有値問題に変形できる. n は固有値 λ , w は A の固有ベクトルである. A の階数は 1 なので, 固有値 λ_i のうち 1 つだけが非零, 他は零となる. また, A の対角要素の和 n であるから, 1 つのゼロでない λ を $\lambda_{\max}$ とすると,

$$\lambda = 0, \lambda_{\max} = n$$

となる.

以上から, 重みベクトル w は $\lambda_{\max}$ に対する固有ベクトルとなる. ただし, $\sum w_i = 1$ となるように個々の w_i を $\sum w_i$ で割って正規化している.

また, 意思決定者が首尾一貫して判断しているかどうかの尺度は, 次に示す整合度 C.I. (consistency index) で示される.

$$C.I. = \frac{\lambda'_{\max} - n}{n - 1}$$

(2) 階層構造の作成

最終目標を「大学生の貯蓄目的」とし, 階層図を作成した (図 1). 階層図の作成にあたり, 評価基準の選定では, 貯蓄の目標額に到達したいと考える時期として, 「在学中」「卒業後」「10 年後」の 3 項目を選定した. 意思決定者が貯蓄を行おうとする場合, それぞれが各自の貯蓄目的を持ち, それによって貯蓄の目標額や, どのぐらいの期間で目標に達したいと考えるかは様々である. 意思決定者が大学生であるので, 評価基準については, 「在学中」と大学を卒業し社会人になっているであろう「卒業後」, さらにその先の結婚などの大きなライフイベントを経験しているであろう「10 年後」の 3 つに区分した. 予備調査において, 20 年 30 年先の長期的な目標として貯蓄を考えられないかということも検討したが, 大学生が現実味をもって将来をとらえることができるのは, 10 年後が適切であろうと判断した.

また, 代替案としては, 「人生設計を助ける」「急な出費」「遊び・ほしいもの」「お金がない不安を解消する」の 4 項目を選定した. 代替案の選定にあたって, 金融広報中央委員会「家計の金融資産に関する世論調査」(以下, 世論調査) の調査項目を参考にした. 貯蓄目的に関する回答項目で, 常に上位に選ばれるのは, 「病気や不時の災害への備え」「子どもの教育資金」「子どもの結婚資金」「住宅の取得または増改築などの資金」「老後の生活資金」「耐久消費財の購入資金」「旅行, レジャーの資金」「特に目的はないが, 貯蓄していれば安心」である. これを大学生向けに改めて, 世論調査の「子どもの教育資金」「子どもの結婚資金」「住宅の取得または増改築などの資金」「老後の生活資金」「耐久消費財の購入資金」の項目は「人生設計を助ける」にひとまとめにした. なぜならば, 大学生にとって, 子どもの教育資金や老後の生活資金など, 個々の目的を具体的に考慮することは困難であるからである. 世論調査の「病気や不時の災害への備え」は「急な出費」に, 「旅行, レジャーの資金」は「遊び・ほしいもの」に, 「特に目的はないが, 貯蓄していれば安心」は「お金がない不安を解消するため」に対応させた.

(3) 調査方法

長崎県内の大学生 (大学 1 年生～大学院生) を対象とし, AHP 評価法によるアンケート調査を実施した. 調査期間は, 2004 年 11 月 18 日～11 月 30 日である. 本調査に先だって予備調査 (2004 年 11 月 15 日～11 月 17 日) を行い, 調査内容の整合性を検討し, 階層図の設定を見直した. アンケートは, PC と携帯電話の i モードからアクセス可能な長崎大学教育学部のホームページ上で回答する方法を用いた. このホームページには誰もがアクセス可能であるが, 結果的に, 回答者の大部分 78.0% は長崎大学生で, 21.1% は他大学の学生, 0.9% は短期大学生となった. 大学のホームペー

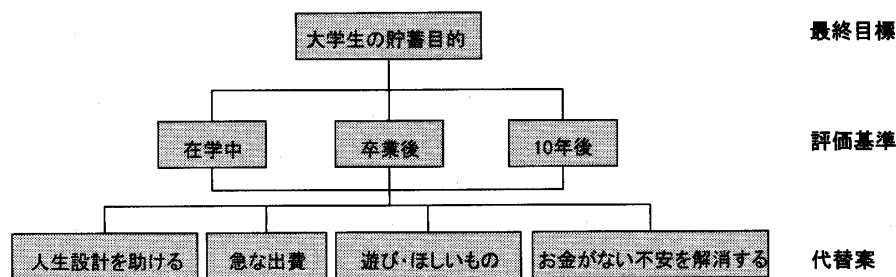


図 1. AHP 階層図

本研究で作成した AHP 階層図である.

ジからの調査であるため、回答者が在校生に偏るということは避けられないが、質問表を配布する場合のように専攻や特定の授業の受講者に集中するというようなことはかなり回避できた。また、調査時間の短縮やコストの削減も実現した。

有効回答数は、109名であった。調査対象者の属性は、表2に示すとおりである。男子学生(38.5%)よりも女子学生(61.5%)が多く、学年では4年生(43.1%)が最も多かった。また、貯蓄保有額は1万以上10万円未満(46.8%)が半数近くを占めていた。自宅生か、あるいは借家・アパート住まいの自宅外生かに関してはほぼ半々であった。

アンケートの内容は、図1に示した大学生の貯蓄意識の階層図の各レベルの要素について一対比較をして、どちらがどのくらい重要と思っているかを選択するか

表2. 調査対象の属性

1. 総数	109名
2. 性別	
女子学生	67名 (61.5)
男子学生	42名 (38.5)
3. 学年	
1年生	9名 (8.3)
2年生	21名 (19.3)
3年生	18名 (16.5)
4年生	47名 (43.1)
大学院生	14名 (12.8)
4. 貯蓄保有額	
1万円未満	15名 (13.8)
1万円以上10万円未満	51名 (46.8)
10万円以上	43名 (39.4)
5. 住居	
自宅	51名 (46.8)
借家・アパート	54名 (49.5)
下宿・間借り	4名 (3.7)

() の数字は全体を100とする割合(%)である。

というものである。重要度の評定尺度は、5段階とした。具体例をあげると、「今のあなたはいつの時期のために貯蓄をしますか。」という質問に対して、「在学中」と「卒業後」を比較して、「在学中」「やや在学中」「どちらも同じくらい」「やや卒業後」「卒業後」の5段階から選択するという方法で評価を求めるというものである。

AHP計算の手順は先述したとおりであるが、実際の分析にあたっては、株式会社日本科学技術研究所の分析ソフト「ねまわしくん」を使用した。

3. AHPの評価結果と考察

AHPにおいては、回答者がつじつまのあった一対比較をしているか否かが問題になる。「在学中」より「卒業後」が重要で、しかも「卒業後」よりも「10年後」が重要というときには、「在学中」よりも「10年後」が重要であると答えていれば、つじつまのあった一対比較をしており、整合性があるといえる。整合性は、整合度C.I.(consistency index)で示され、完全な整合性をもつ場合はC.I.=0となり、C.I.が高くなればなるほど不整合性は高くなる。Saatyによれば、C.I.<0.1(場合によってはC.I.<0.15)であれば、経験的に合格と判断してよいとされている。本研究においては、一対比較の大きな矛盾を調整した結果、いずれの場合もC.I.<0.1を満たしている。

まず、全回答者の総合評価の結果は、図2に示すとおりである。総合重要度(Tw)をみると、「人生設計を助ける」が0.337と最も高く、次いで「急な出費」が0.248、「遊び・ほしいもの」が0.246という順になり、「お金がない不安を解消するため」は0.168と最も低い結果であった。

評価基準の重要度をみると、「卒業後」が0.395、「在学中」が0.362と続き、「10年後」0.242が最も低かった。

世論調査の貯蓄目的に関する質問のなかで、「旅行、

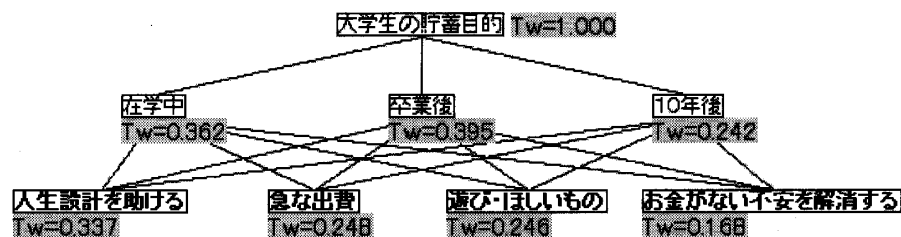


図2. 総合評価(全回答者)

全回答者を対象としたAHP評価結果。

AHP (Analytic Hierarchy Process) による大学生の貯蓄意識の分析

レジャーの資金」を選択するのは世帯主 20 歳代が最も多いことから^{*4}、若い大学生の場合でも、貯蓄といっても、現在の遊びのための資金ぐらいに考えているのではないかと予想していたが、実際は、貯蓄は人生設計を支えるものとししっかりと位置づけていた。また、一般に言われる災害や病気などのリスクに備えるというような深刻な意味での予備的動機ではないかもしれないが、「急な出費」に備えるという意識ももっていた。しかし、親掛かりの生活のためか、お金がない不安という意識は未成熟であると思われた。また、人生設計を在学中や卒業後といった短期的な視点でしかとらえていないことが明らかになった。

次に、全回答者を属性別（性別、学年、貯蓄保有額、住居）に総合評価した結果を表 3 に示す。ただし、属性別結果・考察においては、サンプル数の少ないグループは除いて考察している。

性別で分けて行った総合評価の結果、男女間で以下のような違いが認められた。女子学生の総合重要度をみると、「人生設計を助けるため」が 0.354 と最も高く、次いで「遊び・ほしいもの」が 0.232、「急な出費」が 0.246 という順になり、「お金がない不安を解消するため」は 0.168 と最も低い結果であった。評価基準の重要度は、「卒業後」が 0.408、「在学中」が 0.348 と続き、「10 年後」0.243 が最も低かった。一方、男子学生の総合重要度をみると、「人生設計を助けるため」が 0.313 と最も高く、次いで「急な出費」が 0.273、「遊び・ほしいもの」が 0.245 という順になり、「お金がない不安を解消するため」は 0.168 と最も低い結果であった。評価基準の重要度は、「在学中」が 0.378、「卒業後」が 0.377 とほとんど同じで、「10 年後」0.245 が最も低かった。これより、男子学生よりも女子学生のほうが、「人生設計を助けるため」を高く評価し、「卒業後」をより重要としており、より長い視点で貯蓄をとらえていることがわかった。

学年別に総合評価を行ったが、1 年生と大学院生のサンプル数が少ないので、これを除く 2～4 年生の違いについて考察する。2 年生の総合重要度は、「遊び・ほしいもの」が 0.305 と最も高く、「人生設計を助けるため」が 0.293、「急な出費」が 0.237、「お金がない不安を解消するため」は 0.164 という順であった。

評価基準の重要度は、「在学中」が 0.513 で最も高く、「卒業後」が 0.280、「10 年後」0.208 であった。大学生活の今を大切に、楽しむための手段として貯蓄をとらえていることが顕著に示された。3 年生の総合重要度は、「人生設計を助けるため」が 0.337、「急な出費」が 0.291、「遊び・ほしいもの」が 0.211 と最も高く、「お金がない不安を解消するため」は 0.162 という順であった。評価基準の重要度は、「卒業後」が 0.428 で最も高く、「在学中」が 0.356、「10 年後」は 0.216 という順であった。4 年生の総合重要度も、「人生設計を助けるため」が 0.344 と最も高く、「遊び・ほしいもの」0.240 と「急な出費」0.239 はほぼ同じで、最後に「お金がない不安を解消するため」は 0.177 という順であった。評価基準の重要度も、「卒業後」が 0.446 で最も高く、「在学中」が 0.312、「10 年後」0.242 であった。3 年生よりも「卒業後」と「10 年後」の重要度が高くなっており、卒業を目前にしてやや長期的な視点で人生設計やそれを支える貯蓄を考えられるようになってきていることが示された。以上の結果から、2 年生は在学中の「遊び・ほしいもの」のために貯蓄を考えており、学生生活を楽しまうとしていることが強く示されたが、3 年 4 年と学年があがるにつれ、より長い視点で、人生設計のために貯蓄しようという傾向があることが明らかになった。

次に、貯蓄保有額別に、総合評価の違いを示していくが、1 万円未満のサンプル数が少ないため、これを除き、貯蓄保有額 1 万円以上 10 万円未満と 10 万円以上の比較を行う。貯蓄保有額 1 万円以上 10 万円未満の学生の総合重要度は、「人生設計を助けるため」が 0.348 で、次いで「遊び・ほしいもの」が 0.266、「急な出費」が 0.230 で、「お金がない不安を解消するため」は 0.156 という順であった。評価基準の重要度は、「卒業後」が 0.389 と最も高く、「卒業後」が 0.374 で、「10 年後」0.237 であった。貯蓄保有額 10 万円以上の学生の総合重要度は、「人生設計を助けるため」が 0.324 で、次いで「急な出費」0.273、「遊び・ほしいもの」が 0.206、「お金がない不安を解消するため」は 0.196 という順であった。評価基準の重要度は、「卒業後」が 0.411 と最も高く、「在学中」が 0.320 で、「10 年後」0.269 であった。これより、貯蓄をほとんどもたない学生は学生生活を支えるための手段として貯蓄をとらえており、貯蓄保有額の多い学生ほど「10 年後」といった将来を考えていた。また、貯蓄保有額の多い学生ほど、不安解消という意識が強いことが明

^{*4} 金融広報中央委員会「家計の金融資産に関する世論調査」（2004 年）によると、世帯主 20 歳代の 23.8%（複数回答）は貯蓄目的として「旅行、レジャーの資金」と回答しており、他の世代と比較して最も高い。

表3. グループ別の重みと総合重要度

		評価基準	在学中	卒業後	10年後	総合重要度
性別	女子学生	人生設計を助ける	0.085	0.154	0.115	0.354
		急な出費	0.088	0.095	0.050	0.232
		遊び・ほしいもの	0.112	0.094	0.040	0.246
		お金がない不安を解消する	0.064	0.066	0.038	0.168
		総合評価の重み	0.348	0.408	0.243	1.000
	男子学生	人生設計を助ける	0.079	0.131	0.103	0.313
		急な出費	0.112	0.102	0.060	0.273
		遊び・ほしいもの	0.119	0.082	0.044	0.245
		お金がない不安を解消する	0.068	0.062	0.038	0.168
		総合評価の重み	0.378	0.377	0.245	1.000
学年	1年生	人生設計を助ける	0.058	0.156	0.095	0.310
		急な出費	0.085	0.107	0.042	0.234
		遊び・ほしいもの	0.191	0.072	0.021	0.284
		お金がない不安を解消する	0.067	0.072	0.033	0.171
		総合評価の重み	0.402	0.406	0.191	1.000
	2年生	人生設計を助ける	0.110	0.100	0.083	0.293
		急な出費	0.130	0.060	0.048	0.237
		遊び・ほしいもの	0.190	0.073	0.042	0.305
		お金がない不安を解消する	0.082	0.046	0.036	0.164
		総合評価の重み	0.513	0.280	0.208	1.000
	3年生	人生設計を助ける	0.093	0.157	0.086	0.337
		急な出費	0.105	0.124	0.062	0.291
		遊び・ほしいもの	0.097	0.078	0.035	0.211
		お金がない不安を解消する	0.061	0.068	0.033	0.162
		総合評価の重み	0.356	0.428	0.216	1.000
	4年生	人生設計を助ける	0.069	0.163	0.112	0.344
		急な出費	0.083	0.107	0.048	0.239
		遊び・ほしいもの	0.093	0.103	0.044	0.240
		お金がない不安を解消する	0.066	0.074	0.038	0.177
		総合評価の重み	0.312	0.446	0.242	1.000
	院生	人生設計を助ける	0.064	0.130	0.191	0.384
		急な出費	0.095	0.096	0.073	0.263
		遊び・ほしいもの	0.077	0.073	0.051	0.201
		お金がない不安を解消する	0.044	0.054	0.053	0.151
		総合評価の重み	0.279	0.352	0.368	1.000
貯蓄保有額	1万円未満	人生設計を助ける	0.110	0.140	0.083	0.333
		急な出費	0.108	0.084	0.046	0.238
		遊び・ほしいもの	0.172	0.100	0.032	0.303
		お金がない不安を解消する	0.054	0.048	0.023	0.125
		総合評価の重み	0.445	0.372	0.184	1.000
	10万円未満	人生設計を助ける	0.084	0.149	0.115	0.348
		急な出費	0.096	0.087	0.046	0.230
		遊び・ほしいもの	0.129	0.095	0.042	0.266
		お金がない不安を解消する	0.064	0.057	0.036	0.156
		総合評価の重み	0.374	0.389	0.237	1.000
	10万円以上	人生設計を助ける	0.073	0.141	0.110	0.324
		急な出費	0.094	0.114	0.065	0.273
		遊び・ほしいもの	0.085	0.077	0.044	0.206
		お金がない不安を解消する	0.068	0.079	0.050	0.196
		総合評価の重み	0.320	0.411	0.269	1.000
住居	自宅	人生設計を助ける	0.078	0.156	0.116	0.350
		急な出費	0.079	0.106	0.061	0.246
		遊び・ほしいもの	0.105	0.094	0.043	0.241
		お金がない不安を解消する	0.056	0.065	0.042	0.163
		総合評価の重み	0.317	0.421	0.262	1.000
	アパート・借家	人生設計を助ける	0.089	0.131	0.105	0.326
		急な出費	0.123	0.088	0.049	0.260
		遊び・ほしいもの	0.125	0.079	0.043	0.247
		お金がない不安を解消する	0.073	0.059	0.035	0.167
		総合評価の重み	0.411	0.357	0.232	1.000
	間借り・下宿	人生設計を助ける	0.029	0.218	0.091	0.337
		急な出費	0.037	0.111	0.031	0.179
		遊び・ほしいもの	0.073	0.171	0.021	0.265
		お金がない不安を解消する	0.055	0.140	0.025	0.220
		総合評価の重み	0.193	0.640	0.167	1.000

AHP (Analytic Hierarchy Process) による大学生の貯蓄意識の分析

らかになった。ある程度の貯蓄をもっている学生ほど、お金がなくなったときの不安を強く感じているようである。

最後に、自宅からの通学生か、親元から離れてアパートで暮らしている自宅外生かによって、総合評価にどのような違いがみられるかを示す。回答者の中には、下宿・間借りの学生もいたが、サンプル数が少ないので、住居による比較対象から除外した。自宅生の総合重要度は、「人生設計を助けるため」が0.350で、次いで「急な出費」0.246、「遊び・ほしいもの」が0.241、「お金がない不安を解消するため」は0.163という順であった。評価基準の重要度は、「卒業後」が0.421と最も高く、「在学中」が0.317で、「10年後」0.262であった。自宅外生の総合重要度は、「人生設計を助けるため」が0.326で、次いで「急な出費」0.260、「遊び・ほしいもの」が0.247、「お金がない不安を解消するため」は0.167という順であった。評価基準の重要度は、自宅生とは異なり「在学中」0.411が最も高く、「卒業後」が0.357で、「10年後」0.232であった。自宅外生は、親からの仕送りがあるものの彼ら自身で家計管理をしなければならないので、今現在の「在学中」を重視し、一方、自宅生は生活費に関する心配がないため、「卒業後」を考える余裕があるものと考えられる。

以上、大学生の貯蓄意識に関して AHP 評価を行った結果、全体的には、短期的な視点からではあるが、貯蓄は将来の人生設計を支えるものという認識をしっかりともっていることが明らかになった。属性別にも、性別、学年、貯蓄保有額の大きさ、自宅生か自宅外生によって違いがみられた。

4. ま と め

大学生の貯蓄意識調査を行い、AHP を適用することで、貯蓄行動に関する意思決定システムを解析した。

大学生の貯蓄意識に関して AHP 評価を行った結果、以下のことが明らかになった。

全体的には、貯蓄は将来の人生設計を支えるものという認識をしっかりともっていた。調査対象者となった大学生は、Web 上から自発的に調査に回答することからも明らかなように、貯蓄への関心もあり、また、パソコンや携帯電話という情報機器を活用して

情報収集することに熟知していると言える。このような急速に発展する IT 社会のなかで育った彼らは、日常的に、インターネット上にあふれるマネー情報に多く接している可能性が高く、したがって、貯蓄が人生設計を支えるという認識や、急な出費に備えて貯蓄するという生活設計の考えも身につけている傾向を示したのと考えられる。しかしながら、現実問題として貯蓄をとらえる場合は、短期的な視点でしかないという未成熟さも示していた。属性別には、男子学生よりも女子学生のほうがより長い視点を持ち、学年別には、学年が上になるほど、卒業後の進路や将来を考える必要にせまられるためか、長期的に人生設計を考える傾向が高まった。貯蓄保有額別には、貯蓄保有額の多い学生ほど将来を考え、お金のない不安が強かった。また、自宅生は将来を考える傾向にあったが、自宅外生は将来よりも現在の生活を支えるための貯蓄を重要と考えているという傾向が示された。

以上、AHP による大学生の貯蓄行動の意思決定システムの解析結果からは、必ずしも、若い大学生が将来の目標を抱いていないわけではなく、人生設計実現のための貯蓄という意識ももっていることが明らかになった。

なお、本研究は、平成 16 年度～18 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 16500478 によって行われた研究の一部である。

引 用 文 献

- 1) 小杉礼子：『フリーターという生き方』、勁草書房、東京、54-75 (2003)
- 2) Saaty, T. L.: *Models, Methods, Concepts & Applications of the Analytic Hierarchy Process*, Kluwer Academic Publishers, Boston/Dordrecht/London, 1-25 (2001)
- 3) 木下栄蔵：『入門 AHP—決断と合意形成のテクニック』、日科技連、東京、2-3 (2000)
- 4) 木下栄蔵：『孫子の兵法の数学モデル 最適戦略を探る意思決定法 AHP』、講談社、東京、74 (1998)
- 5) 木下栄蔵、海道清信、吉川耕司、亀井栄治：『社会現象の統計分析 手法と実例』、朝倉書店、東京、171-173 (1998)
- 6) 木下栄蔵：『入門 AHP—決断と合意形成のテクニック』、日科技連、東京、29-31 (2000)